

京と大阪をつなぐ港まち・伏見

認定理由

良質の伏流水と豊かな自然に恵まれた伏見は、古くから農耕が営まれ、豊穰を願う稲荷信仰の発祥の地とされ、平安時代には貴族の別荘・景勝の地として知られた。太閤秀吉による伏見城築城後、城下町・水運の拠点として栄え、その後も、大阪とつながる水路や街道が集まる港町・宿場町として発展した。幕末の戦禍の後、近代化が進む中、酒造りを中心に産業のまちとして復興を遂げる。激動の歴史の舞台である伏見には、数多くの史跡や風情あるまちなみとともに、魅力あふれる伝統文化がいまも息づいている。

主な構成遺産

水路と街道



伏見港公園



十石舟, 三十石船



三栖閘門



巨椋池



伏見街道

秀吉は伏見城の建築資材の運搬等を目的に宇治川の付け替え工事を実施し、伏見港を形成。大阪との水運拠点として三十石船などの旅客船も往来。高瀬川の整備で京・伏見・大阪を一本の水路で結び、さらに琵琶湖疏水の開通で大津まで結ぶ水運ルートが完成。昭和37年(1962)まで舟運は活用されるなど、伏見港は日本最大の内陸河川港であった。

昭和4年(1929)建設。大正大洪水をきっかけに建設された施設であり、船の通航だけでなく治水施設としても重要な役割を担っていた。

万葉集にも詠まれた名勝地。秀吉の土木事業により宇治川と分けられ、太閤堤などで水陸の交通網が整備された。巨椋池は明治の干拓事業によりその姿を消し、今は農地と住宅地が広がる。

東山区五条を南下して、伏見に通じる道。豊臣秀吉が伏見城を築城した頃、京と伏見を直結する道として開かれたといわれる。

良質な水と酒造り



御香宮神社



清酒



酒蔵群

御香宮神社の湧き水は、平安時代、病気に効果のあるよい香りの水が湧き出したことに由来して「御香水」と呼ばれる名水。その他、白菊水や關伽水など伏見には名水が数多くある。

酒造りは伏見を代表する一大産業であり、造られる清酒は口当たりが柔らかいことから、灘の男酒に対し女酒と呼ばれている。

宇治川派流(濠川)から臨む白壁土蔵の酒蔵群は、酒どころの象徴として親しまれている。

城とまちなみ



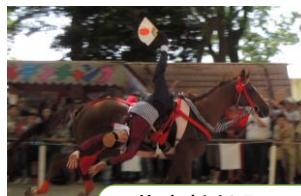
指月伏見城



木幡山伏見城

秀吉が隠居所として「指月丘」に指月屋敷を築き、その後、屋敷を本格的な城郭として改築し、指月城となる。文禄5年・慶長元年(1596)の大地震による倒壊後、木幡山に再建。秀吉没後、一度焼け落ちたが、徳川家康が復興した。寛永2年(1625)頃に廃城。なお、現在の伏見桃山城は、伏見城花畑跡に昭和39年(1964)に建設された遊園地内に建てられた模擬天守である。

受け継がれる文化



藤森神社 駈馬

藤森祭で行われる行事。疾走する馬上にて武士の戦での騎乗技(一字書・手綱潜り・杉立ち・藤下がり他)の妙技が披露される。市登録無形民俗文化財。



三栖の炬火祭

三栖神社の若中で構成される炬火会によって行なわれる行事。神幸祭の夜、大炬火に火を灯し、神輿巡幸の先導役として巡行する。市登録無形民俗文化財。



伏見人形

全国90種類以上もある土人形の中で、伏見人形の系統をひかないものはないといわれる。日本の土人形の元祖であり、素朴な美しさを誇っている。



城下町

木幡山伏見城と整然と区画された城下町を描いた伏見桃山御殿御城之画図(国立国会図書館蔵)。現在の伏見の市街地は、この城下町の都市構造が基盤となっている。



まちなみ

伏見には城下町・宿場町としての風情あるまちなみが残る。寺田屋は坂本龍馬が難を逃れた伏見の船宿で、鳥羽伏見の戦で罹災し、西隣に再建された。

豊かな自然と信仰



深草遺跡

大規模な初期農耕集落で、弥生中期初頭～中葉にかけての集落跡。深草は京都盆地の中でもいち早く水稲耕作が始まった地域。



稲荷山

古来、稲荷山は神が鎮まる山円錐形をした山(神奈備)として信仰されている。山中には多くのお塚がある。



伏見稲荷大社

『山城国風土記』逸文に由来がみえ、秦氏によって祭祀がなされ、その子孫が代々祠官となったと伝わる。全国約3万社の稲荷神社の総本宮。



伏見山荘・伏見殿

風光明媚な指月の丘に、橋俊綱が伏見山荘を営んだ頃から伏見の名が知られるようになった。その後、伏見殿が後白河上皇により造営された。



伏見桃山陵

230段ある長い階段を上ったところにある明治天皇の陵。木幡山伏見城の本丸はこのあたりにあった。

注:上記の構成遺産は一例で、上記以外にも市内には多くの京と大阪をつなぐ港まち・伏見にまつわる文化遺産がある。